

『日本医師事務作業補助研究会第2回例会』開催報告

平成24年6月30日（土）、東京・日本青年館にて第2回例会を開催し、166名のご参加をいただきました。



厚生労働省 唐澤剛大臣官房審議官

会に先立ち、厚生労働省の唐澤剛大臣官房審議官よりご発言をいただきました。

「医師事務作業補助者の仕事は、我が国では比較的新しい仕事ではありますが、重要な仕事です。皆さん方が先駆けとして、我が国の医療システムをふまえた専門の領域を打ちだしていただきたいと思います。医師事務作業補助者の活動の場は今年よりも来年、来年よりも再来年とさらに大きくなります。人口減少社会ではまれな成長領域であり、これから開拓しなければならない分野です」

との激励の言葉をいただきました。

「特別講演1」

外来診療における医師事務作業補助者の「導入・教育・成果」

勝木 保夫 石川県支部顧問（やわたメディカルセンター 理事長）

やわたメディカルセンターの医師にアンケート調査を実施したところ、書類の作成、電子カルテの入力、検査予約、癌などの登録業務、ホームページの作成などが負担感の強い業務としてあげられ、診察や手術など医師本来の業務に対する負担感は認められなかったことを示されました。医師事務作業補助者を配置するにあたっては、スタッフを医事課より選抜し、選抜されたメンバーだけでなく医事課スタッフ全員が一丸となって医師事務作業補助の研修を受けたとのことです。医師も医師事務作業補助者の教育に熱心であるが、各診療科によって診療内容および医師事務作業補助者に任される内容が異なるため、医師事務作業補助者の仕事内容を一律に定めることはできず、各診療科の特徴を生かすことが重要であると述べられました。また、医師事務作業補助者を配置することにより、医師のみならず看護師も本来の業務に専念することができるようになったとのことです。

「医師事務作業補助者に求められているものは、医療の質の向上である。それを実現するにはチーム医療が重要であり、医師事務作業補助者もチームの一員として不可欠な存在である。」と締めくくられました。



「特別講演2」

医師事務作業補助者への期待

大宮 史朗 羽島市民病院 診療部長



導入開始当初は、医師事務作業補助者が配置されたことを医師が認知していなかったり、医師が医師事務作業補助者にどんな業務をどこまで任せてよいのか戸惑ったりと、医師、医師事務作業補助者共に困惑の表情が見受けられたとのこと。また、医師事務作業補助者の医学知識の少なさも見受けられ、当時の課題として示されました。現在は、2011年4月よりクラーク室として医事課より独立し、文章作成や診療補助としてカルテ入力も行っているとのこと。

「医師事務作業補助者は、医療スタッフの一員であり、患者と医師をつなぐコーディネーター。地域支援クリティカルパスなどは、医師をはじめとする医療関係者のみで作り上げる物ではなく、患者さんの意見を取り入れることが重要であり、医師事務作業補助者の積極的な関与にも期待をしている」と激励の言葉をいただきました。

「基調講演」

研究会活動からみた医師事務作業補助者の現状と今後の課題

矢口 智子（特定非営利活動法人日本医師事務作業補助研究会 理事長）

本年6月27日に日本医師事務作業補助研究会は特定非営利活動法人となり、新たなスタートを切りました。法人化することによって、医師事務作業補助者の活動を共有し学びあう環境を提供すること、実務者の活動を可視化し業務の幅を広げること、法律に則った透明性のある運営を行うことが可能になりました。昨年11月に第1回例会（大阪）、地方会（宮崎で3回、石川で1回）、本年4月には配置者管理セミナーを開催いたしました。このような活動を通し、医師事務作業補助者が直面している課題を見つけ、改善のための継続的な活動を行うことによって、会員の皆様のスキル向上に役立てていって欲しいと思っております。まだ新しい職種ではありますが、院内での業務を確立するためには、他職種と協働しながら役割分担を進めていくことが重要だと述べられました。



「事例報告1」

手稲溪仁会病院心臓血管外科における医療秘書の役割について

堂田 明美（手稲溪仁会病院 医療秘書課）

堂田さんが所属する心臓血管外科では、長時間手術の比率が高く、多くのマンパワーを必要とします。また、他科の数倍にも及ぶ手術時必須項目検査があるため、医師事務作業補助者の介入の需要が高かったことを示されました。現在は他の医療機関からの紹介窓口となり、診療情報提供書や画像データの確認・管理、検査・リハビリの画像オーダーや患者さんへの対応など、専門的な業務を行っております。このように診療科密着型の勤務体制であるため、医師事務作業補助者不在時のバックアップ体制の構築が今後の重要課題であるとのことでした。



「事例報告2」

医療クラークのスキルの向上と平均化を実現するための取り組み

梅田 弘美（岐阜県総合医療センター）

梅田さんの勤務する岐阜県総合医療センターには39名という多数の医療クラークが所属しており、最重要課題であった業務の役割分担やスキル向上への取り組みについての発表がありました。全員参加のクラークミーティングを開催し、院外交流会の報告やマナー研修、勉強会の運営方法についての検討を行ったとのことでした。その結果、業務内容調査票やスキル一覧表を作成することによって、まずはスキルの把握が可能になりました。また、業務マニュアルの作成や、メイン担当者とサブ担当者の配置などにより、業務の確立も進んできたとのことでした。様々なニーズに応えられる医療クラークの誕生を目指しておられますが、「本当に必要なものは、目的意識を持ち、努力を惜しまないこと」であると述べられました。



「事例報告 3」

業務改善への取り組み ～部署変換を通して～ 伊藤 千恵 武蔵村山病院

伊藤さんからは、配置転換を通しての業務改善の取り組みについて発表をいただきました。当初は医事課所属となっていたが、メリットとデメリットを挙げて考慮した結果、本年4月から診療支援部のメディカルクラーク室として配置転換を実現されました。そのことにより、不明確になっていた「業務の役割分担」が明確になったことを示されました。医師との信頼関係を構築するにあたり、

- ① できることから少しずつ
- ② 言われたところまでをやる」から「ここまでできる」をアピールする

に努められたそうです。今後の課題としては、医師事務作業補助者のスキルアップを図り書類以外の業務を拡大していく必要性を挙げられました。



「ワークショップ」

亀田総合病院の取り組みについて

三好 法登志 亀田総合病院 医療管理本部診療部事務室 室長

亀田総合病院では、医師確保のための対策として1997年にすでに医師の事務的サポートを専門に行う部署として診療部事務室が設置されていました。そのため業務範囲も幅広く定着しています。患者様中心のサポート体制を目指してきたことから、問診票のサポートや検査説明、診療介助等、患者様により近い場所での業務を行っています。今後は、診療アシスタント業務を確立し、医療技術者間の橋渡し役を担うことや他医療機関のスタッフとの連携を行う等の展望を示されました。また、医師との信頼関係を構築し自分の必要性を高め、仕事を行うことの価値を生み出す職場作りの重要性についても述べられました。



外来診察室の診療補助業務にドクターズクラークを導入して ～看護師の立場から～

坂口 満智子 芳珠記念病院 看護局 局次長（兼）外来統括師長



看護局の外来統括師長である坂口さんからは、ドクターズクラーク（医師事務作業補助者）を配置することにより、外来看護師を病棟に移動配置することができ、また、各職種の専門性を発揮できるようになったことが示されました。外来診療の中で、多職種が協働して医療を提供するためには、他職種との連携および情報共有が重要であることと、お互いの職種を尊重し、認め合うことが大切であると述べられました。そのためには「意識改革」が必要であると強調されていました。

ベルランド総合病院での取り組み

松井 幸子 ベルランド総合病院 医療情報課主任

ベルランド総合病院では、平成 20 年にセクレタリー部門を設置し、早期から医師事務作業補助者研修システムの確立がなされていました。また、セクレタリー部門の組織として「外来部門」「入院部門」に分かれており、部門別に業務を行っているところが特徴です。今後はさらなる病棟・外来一体化運営の構築をめざしており、課題として人材確保や職場環境の整備、教育方法の見直しやスキル向上等を挙げられました。



(日本医師事務作業補助研究会事務局より)

今回の第 2 回例会では、経営管理者、実務管理者、看護師、医師事務作業補助の実務者といろいろな立場の方からご講演をいただきました。それぞれの視点は異なりますが、目標は一緒だということを再認識しました。何が医師の負担軽減のため、そして患者さんのためになるのかをよく考えれば、皆さんの目指すところは一緒になります。それに向かって一歩ずつ進んでいていただきたい。そういう思いを皆さんと共有して、これからも活動していきたいと思っております。

第 3 回全国大会は、平成 25 年 6 月 29 日（土）石川県金沢市で開催されます。次回も多数のご参加をお待ちいたしております。

事務局長 佐藤 秀次（金沢脳神経外科病院）

特定非営利活動法人 日本医師事務作業補助研究会
<http://ishijimu.umin.jp/>